



TITLE:

自然環境下におけるニホンザルの
攻撃的行動の発達に関する比較行
動的な研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成
果)

AUTHOR(S):

水原, 洋城

CITATION:

水原, 洋城. 自然環境下におけるニホンザルの攻撃的行動の発達に関する比較行動的研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1973, 2: 42-42

ISSUE DATE:

1973-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162446>

RIGHT:

calling の音声とは異なって表現的であり、記号的表出という観点からとらえることができる。

2) 昨年度におこなったのとは異なった家系に属するオトナのメスについて、個体追跡を行なった。その結果、記号行動においても、また個体関係においても、これまでに行なった結果とよく似た傾向を見ることができた。しかし、細かくみると、イ) グルーミングに伴う音声は個体ごとの差がある。ロ) 母とコドモを産んで独立した娘との間には、音声を伴ってグルーミングをする関係と、そうでない関係がある。

3) グルーミングに伴う記号的音声の個体差をみるため、各個体について、グルーミングに伴って発する音声のリストをつくった。

4) 今回は、オトナオス2頭の個体追跡を行なった。オトナのオスのグルーミングに伴う記号的行動は、メスとは異なったものであることが明らかになった。オトナのオス同士のグルーミングは、それに先行して mounting を伴うことが多く、とくにオトナのオスがコドモのオスにグルーミングをしてもらうときには、ほとんどオトナのオスからコドモのオスへの mounting が先行する。オトナのオスとオトナのメスの間でのグルーミングで、音声を伴うことは稀である。

5) 4才のメスを個体追跡し、この個体が、グルーミングを行なうときに音声を伴うかどうかを調べた。この個体は、1年先に初産年令をむかえる。そしてまだ、オトナの順位の中に組みこまれてはいない。結果は、このような若年者同士のグルーミングには音声が伴わないようである。

これらの資料を基にして、グルーミングに伴う記号行動の分析を深め、また一方、個体間関係から社会構造を構築する仕事を進める。

自然環境下におけるニホンザルの攻撃的行動の発達に関する比較行動学的研究

○ 水原洋城 (日本モンキー・センター)

大分市高崎山自然動物園において、ニホンザル自然群を観察し、幼児期におけるマウンティング行動の発達過程を記録して、それを社会的場における個体の攻撃性の発現と結びつけて考察を行なった。その結果を以下に述べる。

1. 行動を形成する諸要素とその発現過程

マウンティングは、二個体の接触から相互のしがみつき合い→とっくみ合い→押さえつけ→のりかかり、という順序で発現する。いわゆるマウンティングと、その後を受け手の側からマウンティングを誘発する行動として発現するプレゼンティングとが組み合わせられて形成され

る。マウンティングの方は、生後 1.5 カ月ほどで出現するが、プレゼンティングは明らかにそれよりおくれて習得される。

2. 行動発現の動機と社会的行動としての位置づけこの行動の動機は、個体が他個体に向ける攻撃性の表に出発していると考えられ、社会的には優位行動として位置づけられる。またこの行動はオスの幼児においてより早く、ひんばんに現われ、優位行動として習得されるに到るが、メスの幼児においては、より不明確な形で現われ、優位行動として習得されることはない。

3. 性行動との関連性

この行動は交尾行動と同じ姿勢をとって行なわれるが、性的成熟に達する遙か以前に優位行動として完成し、それに性的衝動が動機として附加されるのはずっと遅れて、また稀にしか出現せず、しかもオスの同性間に限って見られるにすぎない。従って性行動と共通の起源、動機を持つものとは考え難い。

なお成果の一部を下記に発表した。

水原洋城 (1971): 馬のり論序説。季刊人類学 2 (4): 63-85. 社会思想社。

野性ニホンザルの性行動のパターンの分析

✓ 都守淳夫 (日本モンキー・センター)

実験室に隔離されたニホンザル6対が示す性行動のパターンと、野性のそれと比較するため、1月15日から29日に至る15日間、幸島においてその性行動の自然観察を施行した。観察は、すべて一般情況と個体関係および行動のパターンの tape recording と、全 mounting の8ミリ記録により集録した。観察した性的行動は、オス9頭+2 (個体名未確認)、メス9頭+2から成りたつ25 mounting series であった。これらは、6回の mounting attempt, 291回の mounting と9 ejaculation に集約される。この期間、性行動に従事した個体は、オスでは gori, kumo, ikaru, nosuri, saru, nobori, ei, nomi, semushi の4~20才の個体で4才以上の11個体については直接観察されなかった。また、メスでは, sarume, kaki, shiba, satsuki, sakaki, tsuga, zai, sakura, ego の5~15才の9頭で、5才以上の26頭についても直接観察されなかった。すなわち、オスでは45%、メスでは26%の個体の性的行動がこの期間に記録された。オス、メスの平均 mounting series の観察回数は26回、選ばれた対象個体数はいずれも1.8頭であった。各 mounting series の mounting 数は1回から115回にわたり、その平均は11.5回であった。また ejaculation に達した9例の平均 mounting 数は7.9回であった。115回の series は ei と kaki との間で約2時間を経過して行なわれたも